

茂吉の見た左沢

神村ふじを

本会会員の丸山弘子氏から『三四二の花』というエッセイ集をいただいた。短歌とはこれまで縁がなく何分不勉強で、いただいたことに対しても甚だ失礼と思い、この稿を機に自分の浅学に活を入れるつもりで原稿に向かっている。

上田三四二先生についても十分存じ上げていなかったもので、半信半疑で広辞苑を引いてみると、出身、功績等きちんと記載されており、ネット版百科事典のウィキペディアには、医師でアララギ派の歌人であり著書も50冊以上に上るとあった。宮中歌会始の選者で紫綬褒章受章者であることも分かった。医師でアララギ派の歌人と聞いては、浅学の身でも郷土の歌人・斎藤茂吉のことを書かずにはいられない気分になった。

茂吉については、短歌に疎い私のようなものでも、郷土が誇る偉人であることは山形県人なら誰でも知っている。さらに、県人として6人しかいない文化勲章受章者の一人なのだから、小学生でも斎藤茂吉という名前だけは知っている。

斎藤茂吉は1882（明治15）年5月、山形県南村山郡かなかめ金瓶村（現 山形県上市市）に守谷伝右衛門家の三男として生まれた。守谷家は農業と養蚕を営み、宅地田畑合わせて四町五反余の小地主的な自作農であった。

茂吉は、当時としては恵まれた環境の中で、読本、作文、習字、図画を得意とする少年として成長し、茂吉が14歳の1896（明治29）年8月、茂吉の並外れた資質に着目していた守谷家の菩提寺である宝泉寺住職の仲介で、東京浅草で開業していた親戚筋の斎藤紀一の養子となるため上京し、医師を志すことになる。

東京では、開成中学、一高、東京帝国大学医科大学と進むが、中学から高校にかけて佐佐木信綱の『歌の葉』や正岡子規の遺稿集『竹の里歌』に影響され、歌人としての道を歩むようになった。伊藤左千夫を師と仰ぎ、大正昭和期におけるアララギ派の中心人物となった。

以後は世に語られている通りなので省略するが、あくまでも精神科医を本来の生業とする姿勢は崩さず、「歌は業余のすさび」と称していたと言う。しかし、息子の北杜夫は、「茂吉の心の九割は歌に打ち込んでいた」と評している。

茂吉は生涯のうち3回（明治27年、29年、昭和4年）左沢あてそがわを訪れている。

最初に来たのは1894（明治27）年数え13歳の時、修学旅行でもあったのだろうか、上山小学

校の先生が高等科の生徒5人を引率して、庄内旅行に出掛ける際、左沢の百目木どめきに一泊している。

ここ（左沢）に来ると川幅はもう餘ほど廣く、こんな廣い川を見るのは生れて初めてである。また向うの断崖に沿うた僅ばかりの平地をば舟を曳いてのぼるのが見える。人が二、三人前ごみへのめるようにして綱を引いてのぼってゐる。かういふ光景もまた生れて初めてである。暮方になる。川の規模の大きいのを見てゐると、今度は小さな帆を張った舟が、反対の方に矢のやうにくだるのが見えた。これは曳舟とは違ってまた特別な印象である。そのとき「みんな知ってんべ、最上川は日本三急流の一だぞ」と先生がいった。その日の夕食には鮎はやの焼いたのが三つもついたし、翌朝はまた鮎はやの焼いたのが五つもついた。何も彼も少年等にとっては珍しい。十二錢づつばかりの宿料を拂って其處を立った。「鮎はや旨かつたなえ」「旨かつたなえ、おれ頭も皆食た」「おまへ腹わたも食たか」「うん腹わたも食たす、骨も食た」（「最上川」東京日日新聞、1938（昭和13）年6月）

われいまだ十四歳にて庄内へ旅せし時に一夜やどりき

『たかはら』昭和4年 歌碑／左沢原町交差点角

その後、湯殿山近くの志津に一泊、六十里越街道を越えて庄内へ。鶴岡と湯野浜にそれぞれ一泊し、初めて海を見た。上山では太陽が山から出て山に入るのに、雲が紅く染まりながら海に入る太陽を見て大変驚いたという。その後、酒田に向かい一泊して旅は終わる。

2回目は2年後の1896（明治29）年、茂吉が斎藤家に養子に入る直前、父親といっしょに湯殿山に登っており、資料が残っていないので断定はできないが、その際左沢を経由して行ったものと思われる。息子を養子に出す決意をした父・伝右衛門が茂吉の無病息災を願う三山詣であったようだ。

3回目は1929（昭和4）年9月14日、茂吉47歳の時だった。前日の夜行列車で上野を発ち、まず大石田に行き、大石田で最上川を見てから山形に引き返し、左沢に着いたのは午後3時頃だった。

駅で人力車を頼んだ茂吉は福田正直家を訪れた。正直は、歌誌「アララギ」で茂吉の選を受けており、二人は師弟の間柄だった。その日茂吉は中折れ帽子を被り、グレーがかった縞の服に身を包んでいたと言う。福田家で一服したあと、正直とその父、妹とともに百目木の築やなに行った。

ちょうど落ち鮎の季節で、築に下ってくる鮎を見た茂吉は声を上げて喜んだ。それから築の近くの料亭に行き、ビールを飲みながら鮎の塩焼きなどとともに、茂吉の好物である鰻の蒲焼きを食べた。こうして茂吉は上機嫌になり「新庄節」を歌ったと言う。

宴のあとは、遠回りしながら遊郭の前を通り福田家に帰り、その夜、茂吉は正直の求めに応じて自作の「高野山大門の歌」を揮毫した。

南より音たて、来し疾きあめ大門外の砂を流せり

『ともしび』昭和25年 歌碑／左沢元屋敷遊郭跡

翌15日は八幡神社の例祭で、福田家の前を通る獅子舞の露払（道太鼓）を見てから、左沢駅午前8時40分発の汽車に乗り、上山で温泉旅館を経営している実弟のもとに向かった。

茂吉は百目木の料亭で鮎、鰻などを食べたのだが、根っからぬるぬるしたものが好きだった。

茂吉の門人で茂吉が山形に疎開した際世話をした板垣家子夫は生前、「先生は、とろろ芋、鰻、泥鰌、納豆、海草といったぬるぬるしたものに目がなかったですね。特に鰻が好きだった。最上川でもたまには採れますが、ない時は鮠を蒲焼に出しますと、『これはまた変わった鰻だな』と言いながらもむしゃむしゃ食べていました」と語っている。

茂吉自身、「鰻を食べて5分も経つと、木の緑が鮮やかになってくる」と周囲に語っているし、そのことは斎藤茂太、北杜夫の息子たちも認めている。鰻を含むぬるぬるしたものは茂吉の偉大な仕事の活力源であったようである。

左沢の町は、今は築も遊郭もなくなり、最上川舟運で栄えた当時の名残として、雛人形や原町の家並みに昔をとどめるばかりになった。しかし、最上川は今も滔々と流れ、舟を人力で曳いた綱手道の跡も残っており、茂吉を感嘆させた往時の舟運の姿を思い起こさせる。

左沢の町は、最上川の流通や往来によって形づくられた文化的な意味を持つ地域特有の景観であるとして、2013（平成25）年3月、国から県内初の「重要文化的景観」の選定を受けた。

左沢原町（下の写真）、横町、内町の整備、築場跡、柏瀬の景観の保全等、町の誇り、町の遺産として今後も保存整備に努めていかなければならないと感じている昨今である。

#### 〈参考文献〉

『新訂版・年譜 斎藤茂吉伝』藤岡武雄、沖積舎（昭和57年）

『細谷不句と師河東碧梧桐』鈴木啓介、永田書房（平成18年）

『地域社会研究』第7号、山形地域社会研究読書会（昭和57年）所収「斎

藤茂吉と左沢」松田進（大江町文化財保護委員）

